

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.190
2019.7.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第28回 ● 沼田頼輔の「大森式」突起に学ぶ

加曾利B1式の形成と定着に関わる注口付土器の把手は、出土遺蹟を異にしての命名となる「沼部式」→「御所見式」への形式変遷に尽きるが、文様帯との関係を不問とする往時状況はさて置き、『大田区史』等では前者が「加曾利B1a式」、後者は連続する「加曾利B1b式」及びそれ以後に相当する。また、夫々の分類内にも変化・変遷を観たが、順序決定は文様帯により検証される。

次に採り上げるのは深鉢・鉢に附される突起の分類である。坪井正五郎が「コロボックル美術の標本たるの価値」と絶賛するように、突起の立体的な装飾造形は器面の「沈文」や「浮文」、あるいは縄目や筋目とは比較にならない程に精巧な制作を極めており、しかも大森貝塚の多種多様な形態には滑らかな変化も推定され、沼田頼輔は明治31年の連載2回目である「把手の分類(前号の続)」において大森貝塚発見の45例の突起に他例を加え総数63例の突起を記載し、「大森式」と命名の上、単線(系)ではあるが簡素から複雑への漸次的な変化を企図する形態学的分類を実践しており、恰も「先史紋章学」の如き緻密な観察に学びの対象を見い出す。

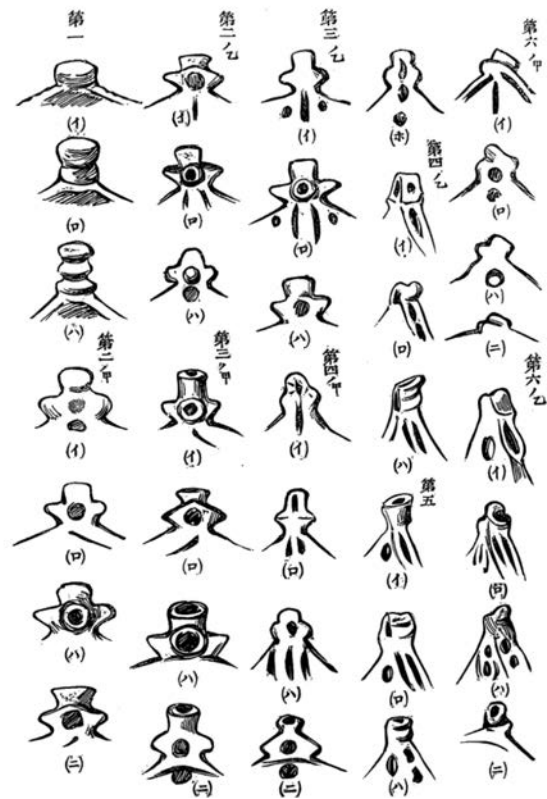
沼田頼輔の「大森式」突起は「類似度順序形態学(モノ・シーケンズ理論)」に従い、第34図と後掲の第35図として開陳され、第34図の「第一」～「第六」の分類(甲と乙は表裏等)は「第一期」～「第六期」の変遷を、続く第35図の「第七」～「第十二」は「第七期」～「第十二期」の変遷を示し、「最初乳頭上の突起より起こりこれを骨子として漸次種々の意匠を加えたるにあり」の加算変遷を筋金とする。

「大森式」突起の分類には漸次的な加算変化を導出するという目的的な手続きに学史的な意義を認める立場であるが、他方で坪井正五郎が危惧した始点/終点/分岐の特定問題も端的に横たわり、更には今日的な変遷観も複合されることで読者の理解を妨げている。そこで直感的に否定ありきで変遷の是非を議論するのではなく、黎明期において順序を見極める目的の下に加算変化を漸次的に導出する、という先端的な手続き型方法を確認する。例えば、第34図の「第三期に属する把手は第二期に属する把手にして其の乳頭上に一個の凹みを生ずることを特徴となす」、続いて「第三期に属する把手にして更に其の四周に條痕及凹みを作りたるものを第四期となす」、そして「第四期に属する把手にしてその下部に一孔を貫穿せるものこれを第五期の特徴となす」、と分類するのは、製作側の立場から変化の要因を最小限の加算手続きで済ませる視点に他

ならず、最小限の加算変化で分類が動的に連鎖する「類似度順序形態学(モノ・シーケンズ理論)」に至る。

しかしながら、「第三期」から「第四期」(除く(二))への実際の変化は、加算以外に「乳頭上に一個の凹み」を施文しない、という減算変化が一つ抜け、その為に変化の動的増減手続きが最小限にはならない。この不具合は「第二期」(除く(イ))を「第三期」と「第四期」の中間に置くことで目的が達成できるはずであるが、そうしない理由は沼田頼輔による始点の特定にあり、即ち、「第一期」(口)を最も簡素な始点とし、「第二期」(イ)への変化を推定するからである。

因みに第34図は概ね「第六期」((二)を除き「加曾利B1-2式」期)が古く、「第一期」(「大森3式」～「高井東式」)に向けて順次新しくなる見事なまでの逆順の導出には新古の特定法が渴望されつつ、来るべき大正デモクラシーによる層位学を俟つ。



▲第34図 沼田頼輔の「大森式」突起(その1)

※巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 沼田頼輔の「大森式」突起に学ぶ(第28回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第21回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第183回) 横山瑛一 …3
■考古学者の書棚 「弥生の村」 園原悠斗 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「…それでは 何だ」(第21回) ————— 間壁 忠彦・間壁 霞子

5. 富比賣の出現(天平宝字七年銘の墓地買地券)(4)

先回は富比賣の墓地買地券と、対比の為、太宰府の宮ノ本出土墓地買地券と、中国後漢代の簡略な買地券の一例を示した。その中で、宮ノ本例の方が、中国の例に近いことを述べた。ただその時、富比賣の方は年代が明確に書かれていて、奈良時代も後半の763年だったが、宮ノ本の場合は、最初の年号銘部分が不明瞭で、明確な年代は不明であった。その火葬墓の副葬品も買地券以外明瞭でなく、周辺遺跡の状況から、奈良末から主に平安初期とされているようだ。

実は最初、岸先生から宮ノ本遺跡の話をついた時、「年代ははっきりしないのだが、息子の名前が「好雄」だから、こうした「雄」の付く名前は、大体に奈良時代も終わり頃から多くなるのだが…」とあとは濁された。正確なことしか口にされないと聞いていた先生の感想的な発言だった。

私たちにとっては、それは納得だった。人の名前には流行のあるという常識である。そうして私たちの古代人名に対する、乏しい個人名の中で直ぐに思いついたのは、吉備真備の子供の一人にも確か「枚雄」がいたな、と言うぐらいの事であったが、遺跡の年代は、遺跡の状況から発掘当事者が判定するものとの思いで、特に触れることも無かった。おそらく多くの古代人名が頭にあった先生には、幾人かの「雄」の付く人名が浮かんでいたのだろう。

考えてみれば、吉備真備の軍略で、たちまちに終息したとする藤原仲麻呂の乱の当人、仲麻呂の息子にも、二人の「刷雄」と「薩雄」がいる。この両者は共に第六子とされていたし、名前の読みは同じでもあるので、同一人物との考えもあるようだ。しかしそれぞれに違った生涯も語られている。「刷雄」の方は、唐への留学生となっており、父の乱の際は、乱後に妻子は全て斬られたが、当人は出家していたのか、禪行により流罪で、後には許されて役人となっているようだ。「薩雄」の方は、父がバックアップして位に付けた、淳仁天皇の舎人だったようで、父仲麻呂と共に誅されただろうとされる。双子だったのか、それとも母の違う、双子的存在なのか…つい横道に逸れるが、いずれにしても、時の著名人の子供名に付けられた「雄」字である。

改めて考えてみれば、吉備真備は天平勝宝六(754)年から天平宝字八(764)年の間は、大宰府政庁での最高位とも言える高官である。彼はここで多くの仕事をしている。真備の息子の泉と枚雄は、父が都に帰って後の、神護景雲元(767)年に、共に無位より従五位下に任じられた。彼らはそれまでは、父と共に大宰府にいたのであろうか。

宮ノ本買地券の「好雄」の名は、大宰府の役人であったと思われる人物が、息子の名前に、時の上司の息子の名前「枚雄」にあやかって付けたのでは…真備の中国文化への見識や知識に傾倒してのことかもしれない…真備が都に帰って後も、息子に真備から聞いていた中国の話や、日本には無い、墓地は土地の神から買い、その証明の買地券を墓に入れると、子々孫々まで栄えるという話など、よく話し聞かせていたとしたら…など想像は幾らでも膨らむが…

岸先生はそこまで考えられたのだろうか…何もこの件では聞いていない。ただこの火葬墓に与えられている年代観は、大変良

く合っている。

このように考えれば、富比賣の墓地買地券と大変近い時期とは言え、富比賣さんの方が少々古く、また中国での墓地買地券とは、多少性格も違うといえよう。富比賣買地券の方は、土地の神から買い取ったという重要な要素も無い。ただはっきりしているのは、白髪部毗登富比賣は、矢田部一家の一員(古代には結婚しても、旧姓である。子供は原則父方姓)だが、戸主石安との関係は不明、妻とも母とも記載はない。墓地を買った当人も分からない。

中国の墓誌の場合、死者本人が墓地を買う形式も多いようだが、富比賣の場合は不明で、まったく売買の対価もない。矢田部益足という郷長は、立会人的な立場に思われるが、買った当人であっても良いような状況も窺える。感覚的な言い方ではあるが、博に彫られた戸主石安の名は浅く、字に強さも無い。一方益足名の方は2面とも、書き慣れた強い字である。そのためよく読めて「益足之墓地買地券」と呼ばれてきていたのだろう。しかもこの益足は国の末端組織の役職ながら、当時は「首・史」は「毗登」とすべきことを十分に認識していた。この買地券製作に対しては、益足は強い関係者だったと思われる。

今ひとつ気になるのは「比賣」である。『寧楽遺文 上巻』中などに見られる女性名には、男性と区別の為にか、本来から付いていたのか良くは分からないが、名前の末尾に「賣・女」の付くのが普通である。膨大ともいえる女性名の中で「比賣」とするのは、僅か数例の「意比賣」「古比賣」「乎比賣」「御比賣」「意等比賣」などの10例にも満たぬ程度であった。これは本来の名前であろう。「比賣」字は年令には関係ない。

女性に「比賣」のつく名前は『古事記・日本書紀』中では、皇位に近い女性の名前に多く、日子・日女の系譜で、尊称的である。数少ないわが国の墓誌の中の、女性の一人、鳥取県・因幡国から采女として都に行き、女官として一生を過ごしたであろう女性、「伊福吉部徳足比賣」は、和銅3(710)年に埋葬されているが、男性的な名前に「比賣」と「臣」が付いている。地方の官僚としては当時では得がたい従七位下であり、地元で丁重に埋葬されている。比賣は女性への敬称か。

富比賣も地元では重要な敬意を表すべき、女性であったのだろう。いま少し彼女の周辺を見てみよう。

間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる

1951年 岡山県立操山高等学校卒業

1955年 岡山大学法文学部法学科卒業

1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員

1973~2006年 同上館長

1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講

1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講

2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる

1951年 岡山県立操山高等学校卒業

1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業

1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)

1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員

1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)

1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)

教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授

1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 183

西都原古墳群 ～宮崎県西都市～

横山 瑛一

宮崎県西都市で埋蔵文化財専門職に就いていると言うと、多くの方に羨ましがって頂けます。宮崎県の中央を東流する一ツ瀬川の中流右岸、通称「西都原台地」を中心に所在する319基の古墳によって構成される「国指定特別史跡 西都原古墳群」は、九州最大の帆立貝型古墳・前方後円墳である「陵墓参考地 男狭穂塚古墳・女狭穂塚古墳」や、その陪塚である170号墳出土の子持家形埴輪や舟形埴輪(いずれも東京国立博物館所蔵)によって勇名を馳せており、それらの保存・調査・整備が私の仕事、と思って貰えるからです。

しかし、それは正しい認識ではありません。まずもって西都原古墳群での発掘調査は基本的には宮崎県の管轄で、西都市の埋文行政職員が携わることは滅多にないのです。では、私が普段何をしているのかと言えば、「市道敷設に伴う発掘調査」や「各種開発に伴う確認・試掘調査」を担当しています。当然、その性質から調査規模はまちまちで、遺構・遺物の存在しない事例もしばしばです。

そんなこんな8年間を過ごしてきた私ですが、1度だけ西都原台地の1丁目1番地とも呼ぶべき「寺原遺跡」内で発掘調査を行なう機会に恵まれました。それが平成29年度に実施した、通称「西都原台地における天地返しに伴う確認調査(第92・93地点)」です。

実は、西都原台地は西都市内屈指の農作物生産地でもあります。原風景を残しながらも畑と古墳が共存する姿は高く評価されており、平成30年には宮崎市の生目古墳群・蓮ヶ池横穴墓群や新富町の新田原古墳群と共に、「古代人のモニュメント-台地に絵を描く 南国宮崎の古墳景観-」として「日本遺産」に認可されています。さて、天地返しとは、耕作地の表層と深層を入れ替えることによって生産量の回復を図る作業のことで、大型重機による掘削は2.0～3.0mにも及びます。当然、地下の遺構・遺物に与える影響も甚大である事から、西都市では長年に亘って事前調査に取り組んできました。その結果、本調査地の含まれる寺原遺跡では計30棟の竪穴建物跡が検出され、その密集度の高さから、古墳時代前半期を通じて営まれた大集落の存在を想定するに至っています。この様な経緯のある確認調査を、いよいよ私が担当する運びとなったのです。



▲道路遺構掘削完了状況(北→南)

最初にお断りしておく、第93地点で遺構を検出することはありませんでした。つまり、第92地点がマイ・フェイバレット・サイトということになります。

第92地点の調査は、約6,505㎡の畑地に対して、約1.5mのトレンチを10.0m間隔で設けることから始めました。結果、8本中4本のトレンチ西端部で2条の溝状遺構(SD1・2)を検出します。精査と観察の結果、SD1・2は北西から南東方向へと調査区を縦断しており、また両遺構は蛇行しながらも、ほぼ並行していることが理解できました。そこで、その全容を確認するためにトレンチを2本追加することにしました。

確認できる限り、長さ約38.0m、幅約1.0m、深さ約0.3～0.4mを測るSD1・2は、結論から述べれば道路を構成する側溝と判断しました。遺構上面は耕作によって削平されており、また遺構自体も調査区外へと伸長していることから本来の規模は不詳。加えて、道路遺構を決定付ける硬化面や舗装面も既に無く、確認できなかったことは残念でした。しかし、心々間距離約5.0～7.0mを道路幅と認識できた事は、個人的には嬉しい経験でした。加えて、これまで実施してきた「西都原台地における天地返しに伴う確認調査」において、その複数箇所で見出されていた溝状遺構の一部には、位置・方向的に本調査区のSD1・2と同一遺構である蓋然性が高いことが分かり、即ち道路遺構として再認識する切っ掛けとなったのです。

以上が、調査成果から見た寺原遺跡第92地点の思い出という事になるのですが、実はこの発掘調査、もう一つの意味でも忘れられない現場になっています。

当事業、実は国からの補助金の下に実施していたので、年度末という厳然たる期限がありました。そのため、確認調査の着手時期は、余裕を持って8月と計画しました。しかし、如何ともし難い諸事情によって着手は遅れに遅れ、ようやくトレンチが設定できたのは寒風吹きすさぶ12月5日の事でした。間の悪いことに、この年は我々が運営を兼務する「西都市歴史民俗資料館」の冬期企画展(2～3月)担当にも抜擢されていました。結果、超えてはならないと定まっているとか、いないとかの一線を大幅に踏み越える4ヶ月が幕を開けてしまったのです。当時、三十路を迎えたばかりの私は、多少睡眠時間を削ればなんとかなるだろうと軽く考えていました。しかし、それも正しい認識ではありませんでした。3月を迎える頃には、自律神経にそれと認識できる程の異常が発生しました。そこからの1ヶ月は、「二度と目が覚めないかも」と思いながら床に就き、「意外と死なないな」と思いながら起床していた様に記憶します。いや、その記憶も大概曖昧だったりするのですが…。

いずれにせよ、万事乗り越えた今となっては「過度の過労」状態を学ぶ良い機会になったなどと嘯けます。が、皆様に於かれましては軽々しく経験されないことを、強くお勧め致します。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは石貫弘泰さんです。

考古学者の書棚

「日本史リブレット3 弥生の村」

武末純一／山川出版社(2002)

園原 悠斗

本書は、弥生時代の時期ごとに変動する集落の内部構造から読み取る「集落構造論」の立場をもつ。そして、そこから集落ごとの役割や立場を解明し、弥生時代の国や村とはどのような様相であったか、どのような国同士・村同士の結びつきがあったかについて検討がおこなわれている。そこで、本書の内容について、大きく2つのテーマについて重点的に紹介することとする。

本書の構成は以下の通りである。

弥生時代の範囲と村

- ① 縄文の村から弥生の村へ
- ② 国の成立と集落
- ③ 国々の連合と巨大な村
- ④ 弥生居宅と都市論
- ⑤ 海・山の村と戦争

まず、序章にあたる「弥生時代の範囲と村」では日本の歴史の枠組みの一つである弥生時代の範囲(定義)と集落の構成要素について説かれている。武末氏の考える弥生時代とは、「農業が始まり、日本の多くの人々が採集民から農民になっていく時代」であり、その本質は人々の見解の相違や文化間の亀裂、モノを欲するがための競合といった「本格的な分裂と対立の始まり」である。また弥生社会の成立の点においても、東アジアの国際社会との交流を踏まえた重要な時代と捉えている。村(集落)の様相としては、居住域の広さや人口、集落内の諸施設を組み合わせ、それぞれの施設がどのような役割を包含しているかについて考察している。以上のように、弥生時代の概念や時間軸の設定、各施設の役割といった明確な諸定義を提示することで、以降の5つの章の内容と見解がより明瞭になっていると言えよう。

本書は5つの章立てによって構成されているが、その中で章を超えて重点的に検討されているのは、①環溝集落、②弥生時代の国について、であろう。

まず環溝集落である。環溝(学史上では環濠と称されるが武末氏は環溝と呼称する)集落の中でも特に本書では「何を囲っているか」に焦点を当てていることに注意しなければならない。東アジアにおける環溝集落の初現と言えるのは中国の新石器時代であり、殷代になり環溝が本格的な城郭都市へと変化するまでは一貫して環溝は人々の居住施設を全て囲い込む存在である。これは朝鮮半島においても同様である。一方で日本列島においてはどうかであろうか。その初現は縄文時代中期にまで遡り、東日本を中心にごく僅かに確認されている。その後、縄文時代後期末になると、北部九州でも見られるようになる。これら縄文時代の環溝の様相は、居住施設に伴わない公共的な行事や祭祀・儀礼といった非日常的な目的や、排水用といったものが大半であり、武末氏はこれを弥生時代の環溝とは一線を画していると考えている。では弥生時代の環溝とは

どのようなものであったのだろうか。武末氏は弥生時代の環溝集落を日本で最初の農村であり、「形で示す農民宣言」であると言う。この表現は非常に端的で弥生時代像を含めた秀逸なものであると言えよう。つまり自然と共に生き、一体となっていた縄文時代に対し、自然を素材や資源として重宝し、本格的な環境破壊へと進んだ弥生時代では明確な自然観の違いがある。人々の日常生活を取り囲む環溝は、人同士や、人と自然を切り離し、互いに溝を作るという観念を行為に直結させた結果であると武末氏は考えるのである。また、縄文時代の環溝集落との違いの一つとして、環溝の外に墓域を形成する点がある。これは人同士や、人と自然の切り離しと共に死者と生者の日常的なつながりの遮断の意味が込められていると考察している。

次に弥生時代の国についてである。一般的な弥生時代研究の見解としては、国と言うほどのヒエラルキーを有する巨大な集落は存在せず、「(初期)国家」としては古墳時代(早くても弥生時代終末期頃)からの開始と考えられている。しかし武末氏は弥生時代の前期中頃から既に「平野や盆地・河川流域を単位とする地域ごとの政治的な組織(=国)」の可能性を指摘し、有力な人々(首長層)と一般の人々(民衆)とに分裂して、それらの頂点に首長(王)が存在すると考えた。また、その根拠を土器の地域色だけでなく、遺構論から捉えようとしており、環溝の有無や祭祀の場と考えられる大型の掘立柱建物、船着き場、墓制などの集落単位での有無から、階層性について検討している。とくに北部九州での国の成立について強調しており、中期前半と後半との間に墓制や副葬品の観点から大きな画期的存在を示唆している。中期後半以降は、奴国や伊都国、そしてツクシ政権といった明確な国家が生まれているとしており、伊都国の中心と考える三雲・井原遺跡を「国邑」と称している。一方で、このような国々は全ての衣食住の生活を維持できる生産体制を有してはおらず、隣接ないしは広域流通によって、交易していたとしている。その代表的な例として、石庖丁や石斧といった石器類や、祭祀や権力の象徴として必要な青銅器が挙げられている。また、これらのようなモノをめぐる交流は時として争いへと発展することについても述べられており、中期後半以降に形成される高地性集落や、逆茂木などにその様子が現れているとした。そしてこれらのような国の形成や国同士の争いについて検討されている中でも、やはり環溝の存在は重要視されていることにも注目できる。

以上、大きく2つのテーマについて重点的にみていった。しかしながら、本書は前述のテーマだけでは説明できない非常に多くの情報と意見を提示しており、紙面の都合上全てを取り上げるに至らなかった。筆者の拙文でどこまで本書の魅力を語れたかは定かではないものの、多くの方が『弥生の村』に関心をもち一読することをねがう。

アルカ通信 No.190

発行日 2019年7月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801
 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp
 URL : <http://www.aruka.co.jp>